



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
 総合病院 聖隷三方原病院
 聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
 静岡県浜松市北区三方原町3453
 TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
 編集者 横地健治

2019年1月1日

重症心身障害の他者理解

横地 健治

ヒトは社会的存在です。ただ一人で絶海の孤島に漂着して、食べ物に困らない環境だったとして、そこから逃れることが絶望的だったなら、生きていけるでしょうか。ヒトはヒトと交わる経験をしなければ、生き続けることはできないものです。これは、国際生活機能分類（ICF）がその生活機能を「心身機能・構造」・「活動」・「参加」の三者でとらえることともつながります。「参加」は社会的存在の実践だからです。

そうなら、一人で生まれてきた赤ちゃんはどんなふうにも社会的存在となるのでしょうか。生後2カ月で、母を自分と同じ種の保護的な他者として自覚して、心の交流を図るようになるとされています。そうして、生後8カ月で「ひとみしり」をするようになり、また、これは、顔認知ができるようになり、自分と他者の関係づけを始めたことを表しています。その後、膨大な数の人の顔に名前をつけて覚えていきます。これにその人の特徴を付加し、自分との利害関係の程度を区別していき

ます。

それでは、有意な言語理解のない重症心身障害児者の他者理解はどうなっているのでしょうか。健常乳児のようないひとみしりがみられれば、明確な他者理解があるといえます。しかし、こうした経験は私にはあまりありません。健常児でひとみしりがいつまでも続かないように、重症心身障害児者でも他者理解が進み、不安な表情を見せることがなくなるのかもしれませんが、あるいは、ひとみしりをする以前の他者理解のままなのかもしれません。この判断は簡単ではありません。違う人に違う行動をとるか否かをよく観察して、他者理解程度を評価するしかありません。

在宅の重症心身障害児者では、乳児期から家族、特に母と多くの関わりを持ちます。さらに、その家族と関係の深い人たちとも交わります。そして、障害児保育を経験し、学校に通うようになっていきます。そうならば、対人関係の経験量は十分あると思われるかもしれません。もちろん、その経験から学ぶ能力は個々で異なりま

すが。

これに対し、小児期早期に施設入所した重症心身障害の子どもたちはどうでしょうか。濃厚な人間関係ははぐくむ特定の少数者(家族)はいません。また、人間関係を持つのは大半が青年・壮年のおとな(職員)です。在宅児と比べれば、機会とは決定的に寡少です。他者理解は対人関係の経験から学ぶもので、その一定量の経験は不可欠です。そうすると、この子どもたちには同年齢の子どもと交わる場を特別に設定しなければいけないこととなります。

私たちの施設には、幼児主体の知育活動を行う場があります(「知育園めばえ」。ここの最大の目的は子ども同士の交わりをはぐくむことです。年齢の近い子に対する他者理解の促進を目指しています。もちろん、小集団で楽しい経験をしながら知的発達を促すことも目的です。ただし、この目的に対しては、個別で行う活動が優先されます。

他者の存在に目覚めた以降、他者に関心を持つことはヒトの本性だと思います。他者をよく知ることは、その社会内の自分の生活を良くすることにつながります。他者理解

の成果はこれにだけではありません。9カ月の子は、ものを指さして、それに注意を向けることを母に求めます。これが「共同注意」または「三項関係」と言われるものです。これが成り立つためには、その他者(母)は注意を向けるものに対し、自分と同じ価値観を持つという確かな期待がなければなりません。これは他者が自分に保護的か否かよりは相当高度なものです。共同注意は他者理解の高度化があつてはじめて成り立つものなのです。その後、同じ価値観を持つ他者を増やしていきます。そして、これらの他者とも三項関係を築いていきます。そうすると、多数の他者と外界のものに対する共通認識ができてきます。言語は三項関係に由来するというのは有力な説です(トマセロ)。そうなら、他者理解はある種の知的能力の発達に欠けてならないものだということになります。

自分で動ける子ならば、関心を持つ他者のそばに自分で移動します。自分で動けなくても、顔を向けることが可能ならば、顔を向けます。これに対し、運動障害が重度な子では行きたいところにも行けません。顔を向けることさえできない子も少なくありません。